**お好み焼きにまつわるエピソード募集**

　一人暮らしの俺は、母ちゃんの作るお好み焼きがどうしようもなく恋しくなった。

　わが家には月に一度、ホットプレートを引っ張り出して、お好み焼きを作る日があった。

　俺の母ちゃんはなべ奉行ならぬ、鉄板奉行だ。キャベツの千切りに始まり、ソースをたっぷりかけるまで、お奉行様の仰せのままに。

　そうして出来上がったお好み焼きは、あっつあっつで、とても旨い。

　曰く、母ちゃんは若いころ、お好み焼き屋でバイトしてそうで。関西人がなんぼのもんじゃい！　というのが、ヘラを握った母ちゃんの口癖だ。

　そんな母ちゃんの元を離れて、俺が都会に飛び出したとき。母ちゃんは柄にもなく、俺のことを心配してばかりだった。もうガキじゃねぇって言ってるのに、一から十まで俺の世話を焼こうするもんだから、こんな時までお奉行様かよと呆れてしまった。

　母ちゃんは俺が家を出る前日、小さなホットプレートとお好み焼きミックス、それからソースの一式を詰めたお好み焼きセットなるものを押し付けてきた。

　そのセットを開けてみて、俺は近場のスーパーで買ってきた、キャベツやら、豚肉やら、天かすやら、使いそうなものをざっと並べた。お奉行様のお好み焼き作りを十年以上見てきたんだ。俺にもきっと、旨いお好み焼きが作れるはずだという自信があった。なんなら、母ちゃんより上手に作れる気さえしていた。

　実際、腕まくりをして、意気揚々と焼き上げたお好み焼きは母ちゃんに負けてなかったと思う。あっつあっつで、アレンジに入れてみたちくわも悪くない食感のアクセントになっている。ソースをたっぷりかけて、ぺろりと平らげてしまった。

　ただ、何かが違うのだ。旨いはずなのに、物足りなくて。俺は鉄板奉行の母ちゃんが作るあのお好み焼きが食べたくなった。

　来月のお好み焼きの日。俺は実家に帰る旨を伝えた。電話越しの母ちゃんは嬉しそうで、ちょっぴり気恥ずかしくなった。

　母ちゃんは今から気合を入れて、待っているとのこと。